

国立歴史民俗博物館の愉悦⑮

旧天津租界の日本人学校関連資料

1900～1970年代

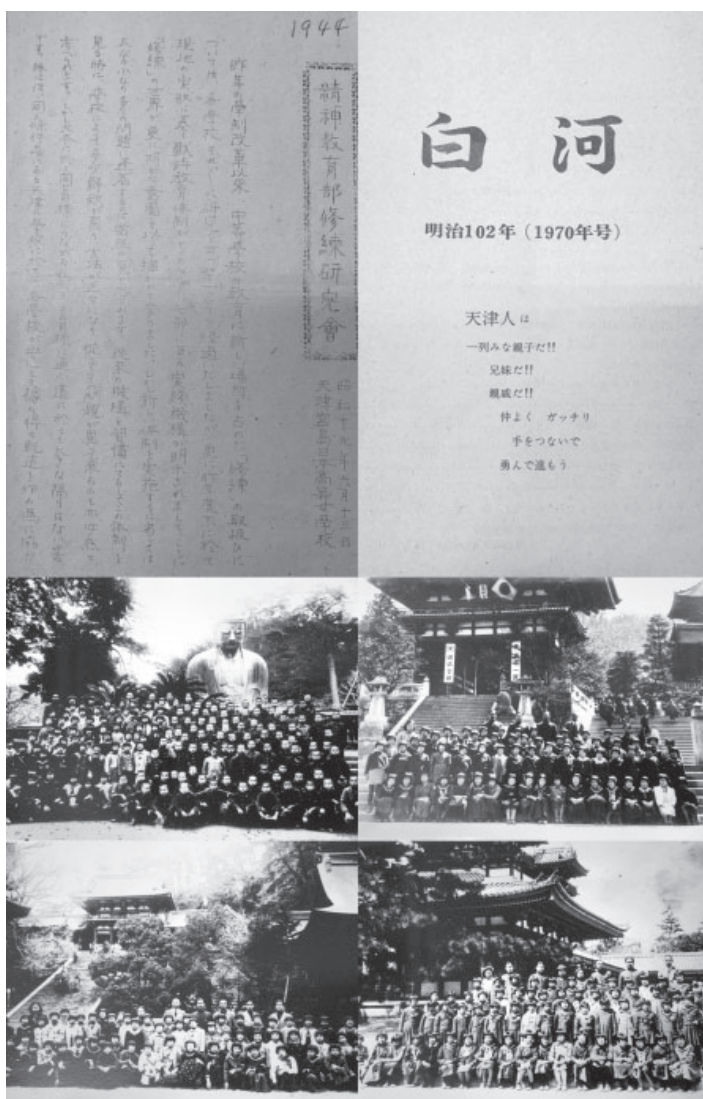
一八九八年、天津に日本最初の専管租界が設置された。当時、天津在留の日本人は僅か五〇人程度にすぎなかったが、この数は太平洋戦争勃発後には五万人まで増えていった。居留民の増加にともなって日本人学校も相次いで設立され、一九四三年の天津租界はすでに国民学校六校と中等学校五校を擁し、その在籍生徒数は九〇〇〇人に達していた。学校によって異なるが、比較的古い学校には天津生まれの生徒が大きな割合を占めており、これらの生徒に対する「日本人意識」を養成するための精神教育が求められた。

国立歴史民俗博物館では、一九九三年から旧天津租界の日本人学校の関連資料の寄贈を受け、現在整理済みなのは三〇〇点を超えている。この貴重な資料群からは戦前・戦時期の天津租界の日本人学校の精神教育、歴史教育の実態をうかがうことができる。

例えば「精神教育部修練研究会資料」（写真左上）という一九四四年の天津宮島日本高等女学校教師用の研究会資料によると、當時同校は「国史劇研修」を精神教育の第一の手段として位置付け、「聖戦下に最も意義の深い史実」を題材に選び、演劇の形を通じて生徒の「日本人精神」の養成を目指していた。

また、租界の日本人学校では、天津生まれの生徒に内地の状況を理解させるため、一九三三年から一九四一年までの間、当時珍しい内地修学旅行を実施した。寄贈資料のなかに、修学旅行の際の集合写真（写真下半）や生徒の日記や回想記があり、そのうち集合写真を見るとモダン都市の姿は見当たらず、写されたのはほとんど京都、奈良、鎌倉の史跡であったことがわかる。

租界の学校で「日本人意識」の教育を受けたにもかかわらず、終戦後、引揚を経て本土に戻った生徒の多くは内地生活に違和感



を覚え、心理的落差と喪失感を抱いていた。戦後、彼らはいつも「老天津」と自称して天津を故郷のように語り、さらに親睦会や同窓会を組織して各種の記念誌を発行していた。『白河』（写真右上）はそのうちの一冊であった。終戦からすでに二〇年以上経つたにもかかわらず、その表紙にはなお租界が設置されたときの「明治」の元号が使われ、下には「天津人は一列みな親子だ!! 兄弟だ!! 親戚だ!!」と書かれている。天津及び「昭和」という時代に対する彼らの思いが一枚の小さな表紙から十分にうかがえるだろう。

以上をまとめると、今回紹介した資料群は今までの租界研究を支える档案（中国の公文書）資料とは異なり、個人の体験・回想から租界の学校教育の実態、及び戦後の旧居留民の心境の変化をリアルに理解できる、きわめて貴重なものであるといえる。

（国立歴史民俗博物館 研究部プロジェクト研究員 賀申本）